

日本も元気にする JICA海外協力隊

九州編
KYUSHU

JICA KYUSHU Japan International Cooperation Agency

世界を変える力は、
日本を、九州を変える力になる。



独立行政法人 国際協力機構 九州センター (JICA九州)
〒805-5805 福岡県北九州市八幡東区平野 2-2-1
TEL : 093 (671) 6311 FAX : 093 (671) 0979
E-mail: jicakic@jica.go.jp
URL: <https://www.jica.go.jp/kyushu/index.html>



いつか世界を変える力になる。
JICA 海外協力隊

[目次]

JICA 海外協力隊の概要	・・・ 3
JICA 海外協力隊の目的	・・・ 5
帰国後の社会貢献	・・・ 6
現職参加制度・現職教員特別参加制度	・・・ 8
九州各県の帰国隊員紹介	・・・ 9
あなたの近くの JICA 国内窓口	・・・ 23
お役立ち WEB サイト	・・・ 24
九州の OV 会情報	・・・ 25

福岡
P9派遣国
マラウイ庄田 清人さん
KIYOHITO SHOTA強い「思い」が物事を動かす。
人との縁を繋げて、
地方の可能性を広げる！現在の職業
株式会社樟乃舎
ゼネラルマネージャー佐賀
P11派遣国
中華人民共和国鶴田 さゆりさん
SAYURI TSURUDA逆境の中で見つけた
新たな志。協力隊で得た
経験を故郷に還元する。現在の職業
佐賀県空港課
職員長崎
P13派遣国
スリランカ吉岡 詩織さん
SHIORI YOSHIOKA協力隊で広がった視野。
国際交流もできる
放課後等デイサービス。現在の職業
クラムボン合同会社
代表熊本
P15派遣国
ガーナ宮本 武蔵さん
TAKEKURA MIYAMOTO地域のための美術館を
目指して。現在の職業
芦北町立星野富弘美術館
参事(学芸員)大分
P17派遣国
マレーシア奥 結香さん
YUIKA OKU2つの協力隊経験を活かし、
ひとりぼっちをつくら
ない社会をつくる。現在の職業
NPO法人Teto Company
理事長宮崎
P19派遣国
セントルシア田阪 真之介さん
SHINNOSUKE TASAKA故郷で続ける「飽か
ない挑戦」、世界と繋がる
「教育」と「ビジネス」を
創る。現在の職業
宮崎大学
特別教授
株式会社グローバル
プロジェクト
代表取締役鹿児島
P21派遣国
フィリピン後藤 まどかさん
MADOKA GOTOフィリピンで従事した
観光地のサポートが
故郷を見直すきっかけに。現在の職業
一般社団法人
南さつま市観光協会
スタッフ

JICA 海外協力隊の概要

JICA海外協力隊は日本政府のODA予算により、独立行政法人国際協力機構(JICA)が実施する事業です。開発途上国からの要請(ニーズ)に基づき、それに見合った技術・知識・経験を持ち、「開発途上国の人々のために生かしたい」と望む方を募集し、選考、訓練を経て派遣します。

基本理念

参加者一人一人が高い志と世界に貢献する気概を持ち、
現地の人々と共にある中で信頼を育み、
活動を通じて日本と世界を理解する。



※独立行政法人国際協力機構(JICA(注))は、日本の政府開発援助(ODA)を一元的に行う実施機関として、開発途上国への国際協力を行っています。

(注)JICA/ジャイカはJapan International Cooperation Agencyの略称です

JICA ホームページ

<https://www.jica.go.jp/about/index.html>



活動分野と職種

<p>計画・行政 国・地域づくりに 関わるシゴト</p> <ul style="list-style-type: none"> ● コミュニティ開発 ● コンピュータ技術 ● 行政サービス ● 防災・災害対策 など 	<p>農林水産 食べ物や自然に 関わるシゴト</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 野菜栽培 ● 家畜飼育 ● 食用作物・稲作栽培 ● 土壌肥料 など 	<p>鉱工業 ものづくりに 関わるシゴト</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 自動車整備 ● 建設機械 ● 食品加工 ● 金属加工 など
<p>人的資源 教育やスポーツなど 人を育てるシゴト</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 小学校教育 ● 幼児教育 ● 青少年活動 ● 環境教育 ● 各スポーツ職種 ● PCインストラクター ● 日本語教育 ● 体育 など 	<p>保健・医療 いのちに 寄り添うシゴト</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 看護師 ● 感染症・エイズ対策 ● 理学療法士 ● 病院運営管理 など 	<p>社会福祉 福祉に関わる シゴト</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ソーシャルワーカー ● 障害児・者支援 ● 高齢者介護 など
<p>商業・観光 マーケティングや観光に 関わるシゴト</p> <ul style="list-style-type: none"> ● マーケティング ● 経営管理 ● 観光 など 	<p>公共・公益事業 生活サービスに 関わるシゴト</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 土木 ● 建築 ● 下水道 ● 廃棄物処理 ● 上水道 ● 番組制作 など 	<p>エネルギー エネルギーに 関わるシゴト</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 電力 ● 再生可能・省エネルギー など

応募できるのは20～69歳の日本国籍を持つ方です。募集期間は年2回(春・秋)、活動分野は9分野190以上の職種があり、農林水産、保健衛生、教育文化、スポーツ、計画・行政など多岐にわたります。自分の持っている知識、技術、経験などを生かせるのがJICA海外協力隊の特徴です。派遣期間は原則2年間ですが、1ヶ月から参加できる短期派遣制度もあります。

JICA 海外協力隊の3つの目的

異文化社会における
相互理解の深化と共生

JICA海外協力隊が現地の人々を理解していくように、現地の方にも、JICA海外協力隊を通して日本が理解され、共生・協働が行われるようになります。深化する相互理解と共生の営みにより持続可能な開発の実現を目指していきます。

開発途上国の
経済・社会の発展復興への寄与

よりよい明日を世界の人々と共有するため、日本が持つ技術や経験を伝え、開発途上国の人々に役立ててもらいます。

ボランティア経験の
社会還元

隊員には、本事業への参加を通して身に付けた知識や経験を日本の地域や世界の発展に役立てることが期待されています。JICAは、隊員が経験を社会還元する取り組みを支援していきます。



JICA海外協力隊の使命、そして願い。

ボランティア経験の社会還元

JICA海外協力隊は異なる文化や生活、価値観に浸りながら、現地の方々と協力して開発途上国の課題解決に向かいます。隊員たちは、広い視野やコミュニケーション能力、新たな世界観を自らの中に育み、各々に秘めた想いや夢を持って帰国します。

「ボランティア経験で培った想いや力を日本の地域社会へ還元する。」

日本から世界へ。そして、世界から再び日本へ。



JICA海外協力隊

「日本で幸せに暮らしてね。」

2年間、彼らのためにと思って活動してきた。でも、あの国を立つ日に気づいた。みんなが自分のことを想ってくれていたこと。そして、心に誓った。彼らと過ごした日々を無駄にしない。世界のどこにいても、きっと、互いを想う心はつながっている。JICA海外協力隊員それぞれが抱く夢、内に秘めた想い。目には見えない大切なものに国境はない。

JICA海外協力隊員が現地に残した想いと行動が、日本にいるわたしたちに元気をくれた！

タンザニア初の小学生対象の野球大会は、「FUKUOKA CUP」2021

これからも日本のように野球の振興に努めていきたいという、タンザニア国関係者の想いと、2017-2019年度にかけて福岡教育大学の野球短期隊員が、ダルエスサラーム市内小中学校で指導を行った貢献を称えて、タンザニア野球・ソフトボール連盟 (TaBSA) によって命名。大会では、各校とも男子・女子・低学年・高学年の子どもたちが一緒になって、プレーを楽しむ様子が見られました。元隊員の皆さんからも「現地の組織で大会が開催されたことに大変感動しています！現地の方々が自ら動いて、このような大会が開催されるのは一番理想的なことです！」とのコメントが寄せられました。タンザニアの現地関係者により、野球を通して、スポーツの楽しさやチームワークの素晴らしさが浸透することを願っています。

※福岡教育大学とJICA九州は、JICAボランティアの派遣に関する覚書を取り交わし、2017-2019年度の3年間に亘り、タンザニア国に「野球」の短期隊員を20名派遣。
※2021年6月には、福岡教育大学とJICA九州は更なる連携推進を目的に連携覚書を取り交わしています。



「外」から見た日本の魅力と課題

昔から日本にあった大切なものがみえた。開発途上国の地域課題の解決を目指してきた経験と想いを、日本をよりよくする原動力へ。

自らが「外国人住民」となった経験を持つ者が果たせる役割とは？

多様な家族のあり方が当たり前。だから、家族の強いつながりと隣人同士が自然と助け合う空気があった。

多文化共生

開発途上国での経験を地域へ、教育現場へ。

地域
コミュニティ

世界を変える力は、
日本を、九州を
変える力になる。

教育
学校現場



堂々とふるさとを語る
子どもが育つ国へ。

企業・民間

※CSR・ソーシャルビジネス等
※CSR: Corporate Social Responsibility
企業の社会的責任

自治体・行政

そこに在るもの・人・資源を生かして、何ができるか。

地元でつながっていく JICA 海外協力隊経験者の想いと行動

さまざまな生き方が選択できる日本へ
【多様な教育の機会確保】

認定NPO法人 龍崎自由学舎 ESPERANZA
えすへらんさ 代表 小田 哲也 さん
(1997年1次隊/コロンビア/青少年活動/福岡県出身)



小田さんは、子どもたちが夢や目標を持つことができれば、自ら考えて積極的にいろいろなことを始めることができると確信し、学校に行かない選択をした子どもたち等が自信を持ち、元気になるためのフリースクールを創設。同じ想いの仲間と、様々な体験活動を通して、社会適応力を育み、人間の生きる喜びを体験できる通い教育空間作りに取り組んでいます。

災害支援のちかちで
【地域貢献×多文化共生×在住外国人支援】

認定NPO法人 地球市民の会 事務局長 (佐賀県災害支援プラットフォーム(SPF) 共同代表) 若永 高寿 さん
(2006年2次隊/中米人民共和国/辞職/佐賀県出身)



若永さんは、佐賀県や市町と連携協定を結んで協働し、平時から災害へ備える「佐賀災害支援プラットフォーム(SPF)」で、県内外60前後の団体が円滑な災害支援活動を推進するためのコーディネートや、密な人間関係の下、住民の困り事がなくなるまで寄り添う支援を行っています。

赤ちゃんからお年寄りまで、
心豊かに暮らせる素敵な田舎を目標に
【地方創生】

NPO法人 霧浦あんばんね 代表 高沼結希 さん
(1983年2次隊/ソロモン/派遣機器 支店/長崎県出身)



地方は少子高齢化が進み、過疎化が深刻な状況になりました。高沼さんはそんな課題に対処するために霧浦あんばんねを立ち上げました。地域を活性化するために、海・山・川に恵まれた自然豊かな霧浦の地域資源を生かしながら、都市農村交流人口を増やす活動や、移住の促進、その他様々な活動・事業を行っています。

「現職参加制度」「現職教員特別参加制度」による
派遣職員や教員の社会貢献と組織的支援・活用の可能性

「現職参加」とは、現在、自治体や民間企業、各種学校、団体等で勤めている人が、休職などの形で、所属先に身分を残したままJICA海外協力隊に参加する制度です。

現職参加には、通常の業務や研修で得られないさまざまなメリットがあります。

社員や職員の活動を通じて
企業や団体の国際協力活動
への貢献につながる。
(CSR活動)

異文化社会に溶け込んだ活動
により、協調性・コミュニケーション能力・語学力の向上を含めた国際感覚が磨かれる。

派遣先の責任ある立場や異文化社会の生活などから、マネージメント能力・交渉能力と周囲への働きかけ意識が養われる。

このようなメリットに注目し、JICAと連携した現職参加制度をグローバル人材育成の一環として活用する企業・団体が増えています。

JICA海外協力隊 (民間連携) 詳細はこちら
https://www.jica.go.jp/volunteer/relevant/company/private_cooperation/index.html



「現職参加制度」 詳細はこちら
https://www.jica.go.jp/volunteer/application/seinen/support_system/incumbent_participation/index.html



「現職教員特別参加制度」 詳細はこちら
https://www.jica.go.jp/volunteer/application/seinen/support_system/teacher/index.html



JICAでは、より多くの人々が国際協力へ挑戦できるよう、さまざまな制度を準備しています。

学校現場への還元

「世界を知り、考えるきっかけを生徒に」(SDGs×総合的な学習の時間)

現職教員参加制度で協力隊を経験した先生方が、さまざまな思いをもって、日本各地の教育現場に戻り、子どもたちへの国際理解教育や多文化共生に向けた取り組みを行っています。また、社会科や道徳、「総合的な学習の時間」を利用して、多文化共生やSDGsについて学びつつ「世界の様々な問題を『ジブンゴト』と捉え、できることを考える」等、児童や生徒がこれからの世界を生き抜いていけるよう、さまざまな工夫を凝らした授業づくりに動んでいます。



地域社会への還元

出前講座 (国際理解教育)

JICA九州では、世界各国の開発途上国で活動してきたJICA海外協力隊の経験者またはJICA職員や各県JICAデスク担当者等を講師として派遣する出前講座を実施しています。

国際協力や開発途上国の文化、暮らしはもちろん、SDGsに関連した取り組み、医療・農業・マーケティング・スポーツなどの専門分野、学校での道徳・総合的な学習の時間・キャリア教育など、ご希望のテーマや内容、時間に応じて講座を組み立てることができます。

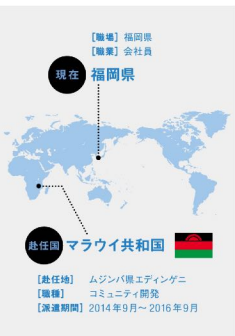
※お申し込みやその他詳細はこちら
<https://www.jica.go.jp/kyushu/enterprise/kaihan/demaes/index.html>



日本も元気になるJICA海外協力隊
九州のフロンティア人材

青年海外協力隊

福岡県



強い「思い」が物事を動かす 人との縁を繋げて、地方の可能性を広げる

庄田 清人さん 株式会社 俵乃舎 ゼネラルマネージャー
Kiyohito Shota

様々な人たちと出会い、夢や思いを実現させてきた。
アフリカから戻って気づかされたのは、「地方だからこそできる」こと。
今は故郷を舞台に、自分と関わる人が自然と繋がり合う「場づくり」を目指す。

難民の特集番組で芽生えた思い 青年海外協力隊でアフリカに

庄田さんの人生の指針を決めたのは、小学生時代に見たアフリカ難民キャンプの特集番組だった。同年代の子どもが飢えに苦しむ姿を見て、「同じ地球に住んでいるのになぜ自分と違うの？」と幼



いながら違和感を抱いたという。世界を村に例えて相互理解を訴える本『世界がもし100人の村だったら』を読み、涙を抑えられなかったことも。そんな少年の思いが明確な目標になったのは、中学2年生の時だった。「担任から青年海外協力隊について教えてもらい、いつかアフリカに行こうと決意しました」

その後、アフリカのために働くことを照準に定め、最短で夢を実現する道を探し始める。サッカーの怪我で理学療法士にお世話になった経験から、リハビリテーションを学ぶために専門学校へ進学。卒業後は、国際保健医療に関わるNPO法人ISAPHの設立母体である、福岡県久留米市の聖マリア病院で勤務

を開始した。業務の傍ら、開発途上国へのスタディツアーや海外からの技術研修員との交流などに携わり、アフリカへの思いが日増しに強くなっていったという。ある時、マラウイ共和国でISAPHが関わる協力隊活動の公募を見つけた。「理学療法士ではなくコミュニティ開発での募集でしたが、かえって面白そうだと応募を決めました」

これまで、同病院から協力隊を目指す者はいずれも退職していたが、帰国後には途上国での経験を業務に活かしてほしいと、病院側が庄田さんの現職参加+承認。見事合格を果たし、ついに長年夢見ていたアフリカへの切符を手にした。

※所属先の身分を保持したまま、休職してJICA海外協力隊に参加すること。



マラウイ出身のローレンス氏(右)と日本とマラウイをITで繋ぎ、グローバルなWeb交流授業が学校教員の「誰より先」になる日を目指している。



飯塚高校にて協力隊の体験談発表。学生に多文化共生の意識を伝えるなど、地球の未来を担う次世代の育成にも携わっている。



「サンカクビルディング」ではグローバルイベントを開発し、市民に国際的な体験ができる場を提供している。

ヘルスパスポートの改善 現地政府を動かす

マラウイに派遣された庄田さんは、村を巡回して乳幼児健診を行った。「体重や身長、栄養状態を測るために腕の太さなどをヘルスパスポート(母子手帳のようなもの)に記録するのですが、手帳のレイアウトが分かり難く、年齢を1歳間違えて表に記入してしまうこともありました」ワクチン接種時に年齢を誤れば、乳幼児の健康被害にも繋がる一改善の必要性を痛感した庄田さんは、カメルーンで開催された国際母子手帳会議に参加。他国の事例などに触れる機会に恵まれ、仲間の協力隊員と連携してヘルスパスポートに関する基礎調査を実施し、レポートにまとめた。

「どうすれば政府に改善を促せるだろうか」そんな時、ISAPHの事業報告会に出席していた保健省スタッフに、ヘルスパスポートの改善案を見せる機会を得た。すると、スタッフの目の色が変わり「これはいい！」と絶賛。その人は政府のヘルスパスポート担当者だった。「思いがあれば物事は動かせる、それを実

感した瞬間でした」この業務は庄田さんの後任が引き継ぎ、ヘルスパスポート改良版の採用が決まった。

感した瞬間でした」この業務は庄田さんの後任が引き継ぎ、ヘルスパスポート改良版の採用が決まった。

“外”を見たことで 俯瞰できるようになった故郷

帰国後、新設された聖マリア病院のヘルスケアセンターに配属されたが、家庭の事情もあり、1年半後に故郷の飯塚市へ戻った。久しぶりの故郷は協力隊に行く前とは違い、俯瞰して見られたという。「人口約13万人の大都市でどれだけあがけるか」次の一歩が決まった。

2018年、個人事業主として地域のヘルスケアに関わりながら、協力隊経験を学生生に話す出前講座やグローバル教育の講師を担当。また、立命館アジア太平洋大学出身のマラウイ人、ローレンス・カチガン氏と任意団体「JA-Net」を設立し、マラウイと日本の子どもをインターネットで繋ぐなど、国際理解の普及に取り組み始めた。飯塚国際車いすテニス大会では、理学療法士として海外選手とのケア兼通訳も担当した。「地方で働くことがあり、地方ならではの可

庄田 清人さん プロフィール

福岡県出身、リハビリテーションの専門学校を卒業後、福岡県久留米市の聖マリア病院で理学療法士として勤務。2014年、青年海外協力隊に現職参加してマラウイで活動。帰国後、同病院に復帰。その後、地元飯塚市に戻り、2018年に個人事業を開始。協力隊経験の出前講座や地域のヘルスケアに関わる活動を行う。2020年より、株式会社俵乃舎のゼネラルマネージャーとして勤務。

能性を見るよくなりました」と庄田さんは振り返る。

2020年、株式会社俵乃舎にゼネラルマネージャーとして入社。同社がリノベーションを手掛ける、市民の憩いの拠点となった「サンカクビルディング」を核にしながら、市街地の活性化に取り組んでいる。商店街では自由に子どもが遊び、商店主たちがその様子を見てくれる。そして、地域に往く外国籍の人々々が個性を活かした販売をする—そんなコミュニケーションを日々繰り返す。「目標は「水」みたいにはなくなりはならない存在になること。自分と関わる人が自然と繋がり合う「場」をつくってきたいですね」

庄田さんの第二の「コミュニティ開発」は始まったばかりだ。

庄田さんへの エール!

株式会社俵乃舎
代表取締役
福富 隆太さん



協力隊で培った人と接する力が活かされている

我が社では、不動産事業に取り組んできた私がかつて担当し、庄田さんにはコミュニティづくりなどのソフト面を担当してもらっています。医療職出身で病院の中の世界しか知らない、企業経営者を中心としたクライアントとの商談は難しい。庄田さんの場合、協力隊でいろんな人に出会った経験が活かされていると思います。人前で話することに長けている点も武器。どんな人、どんな人と繋がってほしいですね。

日本も元気になるJICA海外協力隊
九州のフロンティア人材

青年海外協力隊

佐賀県



逆境の中で見つけた新たな志 協力隊で得た経験を故郷に還元する

鶴田 さゆりさん 佐賀県空港課 職員
Sayuri Tsuruda

中国で向き合った反日感情。その苦しみを乗り越えて現地の人と繋がった経験は、人生の財産となった。そして芽生えた、「国と人とを繋ぐ」という使命感。現在、故郷の佐賀県で「日中友好の懸け橋」という新たな目標を胸に、その想いを実現していく。

「三つ子の魂百まで」を育てる 遊びを通した学びを伝えたい

鶴田さんが青年海外協力隊に興味を持ったのは、高校生のときに協力隊経験者の話を聞いたことがきっかけだった。短大卒業後、幼稚園での勤務を経て協力隊に参加。中国の重慶にある幼稚園に派遣された。子どもたちが話す中国語は、派遣前に習った北京語と異なる四川語。彼らと会話ができなかった悔しさから、鶴田さんは四川語も猛勉強し、現地の人と間違えられるほど語学力を鍛え上げたという。

中国の幼稚園は、遊びを通じた学びを重視する日本の保育とは違い、授業形式の保育だった。鶴田さんは、子

どもが主体で楽しめる、遊びを取り入れた指導を提案。また、「三つ子の魂百まで」と言われるように、「待つ・譲る・並ぶ・相手の目を見て話す」などの「心の教育」にも力を入れた。しかし、同僚たちには「遊ばせただけ」としか認識されず、鶴田さんが考える保育には興味をなさそうだった。

そんな中、保護者参観の企画を担当。『お店屋さんごっこ』を通して、物によって数詞が変わること、お金や歌謡の概念、接客マナーなど、「働く」をテーマにしたキャリア教育を実行してみた。「楽しく学ぶ子どもたちの姿を見て、学びの中に遊びを取り入れる保育の大切さを、同僚や保護者には感じ取ってくれたように感じた」。

※所属先の身分を保持したまま、保険してJICA海外協力隊に参加すること。

一人の人として、教師として 国を越えて向き合う

活動2年目のとき、中国漁船と日本の海上保安庁巡視船が衝突。中国国内で反日感情が高まる中、「日本人の言うことは聞きたくない、早く日本人へ帰れ」と子どもたちが容赦ない言葉を浴びせられた。自分の存在が職場で迷惑になら



前本陣では、東日本大震災の被災地での経験を活かし、県費負担で遊園地業務に従事。現在も、この家族との交流は続いていく。



JICAデスク佐賀、佐賀県国際交流協会と一緒に協力隊広報番組を担当する鶴田さん。世界各国で活動する職員からもメッセージが寄せられる。



NPO活動ではミャンマーのコーヒ園園を訪問。現地スタッフと事業の理解を深め、交渉状況を報告した。

ていないが、鶴田さんは悩んだ。そんなとき、園長から「国と国、人との関係は違ふ。あなたは教師としてやるべきことをやればいい」と声をかけられた。「この言葉のおかげで、周囲から何を言われても『先生はあなたが大好き』と言いつ返す、心の余裕が持てたんです」

半年後、東日本大震災が発生。子どもたちや同僚が義援金を集めてくれ、感動の涙が止まらなかった。また、ニュースで震災直後の日本人の姿を見た同僚からは、小さい頃からの「待つ・譲る・感謝」を続けられているからこそ、有事でも日本人はお互いを思いやる行動がとれると称えられた。「自分が保育の中で大切にしていたことが伝わったようで、とても嬉しかったです」

被災地支援を経て佐賀へ 故郷で協力隊経験を活かす

帰国後、鶴田さんは東日本大震災で被災した岩手県山田町で、子育て支援センターの再稼働や保育園業務に従事した。「故郷のために働く人々と接する中で、自分は故郷のために何もしていない

のでは」と疑問を持ちました。また、協力隊を経験したことで「国と人とを繋ぐこと」、その役割を担う地方自治体こそが重要だと思うようになったんです復興支援活動後、鶴田さんは佐賀県庁の協力隊員特別採用枠に応募、入庁した。

2度目の異動で配属された国際課では、中国との交流事業を担当。貴州省の省都・貴陽市に赴任し、現地の職員たちと交流を深めた。2018年、同省委員会書記が佐賀県を、翌2019年には県知事が同省を訪問し、両自治体の友好関係は強固なものになった。2020年3月、「佐賀県加油（頑張れ）」と4万1千点のマスクや手袋が県に届く。送り主は貴州省政府。新型コロナウイルス感染症が拡大する同省へ、1月と2月に県がマスクを送ったお返しだった。この話を聞いた時、配属先園長の言葉が頭をよぎったという鶴田さん。国と人とを繋ぐ自治体同士との“絆”を感じた瞬間だった。現在、鶴田さんは空港課に所属。県営佐賀空港は中国と空路で繋がっており、『日中友好の懸け橋』としても活躍できる環境だ。「協力隊経験の全てが、今に繋がっています」

鶴田さんへの エール!

公益財団法人
佐賀県国際交流協会
理事長
黒岩 春地さん



佐賀県の顔となり、幅広い活躍に期待

私が佐賀県庁で部長をしていたときに、「JICA枠」の3期生として入庁してくれました。この枠では初めての地元出身者でしたから、嬉しいですね。協力隊経験者には、任地に飛び込んで、何とか現地の人とコミュニケーションを取ろうとした経験があります。県庁の看板に頼るのではなく、住民と向かい合う県庁職員になってもらいたいですね。国際性に特化せず、ジェネラリストとしての活躍に期待しています。

鶴田 さゆり プロフィール

佐賀県出身。短大卒業後、幼稚園での勤務を経て2009年より青年海外協力隊へ、中国に派遣された。幼児教育隊員として活動。帰国後、東日本大震災で被災した岩手県山田町に国内協力隊として赴任。復興活動に従事。2014年にJICA枠にて佐賀県庁に入庁。現在に至る。2017年に認定NPO法人地球市民の会理事に、2019年には佐賀県海外協力協会（JICA海外協力隊OB会）会長に就任し、市民活動でも活躍中。

地域の市民活動にも積極的な鶴田さんは、2018年より佐賀県の協力隊OB会での会長を務めています。コミュニティFMの協力隊広報番組ではパーソナリティを務め、JICAの事業広報にも協力しています。協力隊員の中には鶴田さんの体験談を聞き、参加を決めた人が何人もいたとか。「OB会が背中を押してくれたからこそ、今の自分があります。OB会活動には、感謝と恩返しの気持ちで臨んでいます。協力隊に参加したことでの自分の「引き出し」が増え、どんな逆境の中でも楽しみを見つけて、行動できるよになりましたから」

鶴田さんは自身を押し切ってもらったように、後進たちの背中を押し続けていく。

日本も元気になるJICA海外協力隊
九州のフロンティア人材

青年海外協力隊

長崎県



協力隊で広がった視野 国際交流もできる放課後等デイサービスを

吉岡 詩織さん クラムボン合同会社 代表
Shiori Yoshika

スリランカで学んだのは、地域の人との繋がりを大切にすること。
「日本でも同じように、子どもを地域の中で育てることができるのではないか」
現在、多様な人を巻き込み、子どもたちが自分らしくいられる支援を目指している。

【少数者の特別支援教育に感銘 経験活かして協力隊へ】

「島の子たちが純粋で、少数者のアットホームな環境に影響を受けた」大学の教育学部を卒業した後、私立高校の講師を経て、長崎県立鶴南特別支援学校五島分校高等部に勤務したが、



吉岡さんの特別支援教育*との出会いは、もともとは、国語の教員免許を持っていった吉岡さん。最初に勤めた私立高校で、たまたま特別支援学校の勤務経験がある教員から話を聞く機会があり、興味を持った。そして、講師として赴任したのが教員12人、生徒25人という五島分校。のんびりとした島の雰囲気、和やかに温かい学校の雰囲気が入った。

一方で、バスなどのポスターを見る青年海外協力隊についても興味を持った。協力隊には障害児・者支援の職種がある。「特別支援学校で3年の実績を積めば、協力隊への応募資格を得られることを知りました。自分にもできるこ

とがあると思っただんです」通信教育を通じて特別支援学校教諭の免許を取得し、協力隊への扉を開いた。

【教員が足りない現実 教材づくりで補助員をサポート】

派遣されたのは、スリランカ東部の人口約13万人の中堅都市。市の教育事務所に配属され、特別支援学級が設置してある6つの学校を巡回指導するのが主な活動内容だった。「現場で気づいたのは、教員が足りないという現実でした。小学生から中学生くらいまでの生徒が一緒に学び、4人の生徒を1人の教員が多いところで7人の生徒を1人の



スリランカの民族衣装サリーの着付け体験をはじめ、現地語の挨拶広場などの文化紹介を通じて、子どもたちの世界を広げたい。

教員が担当しているような状況だったんです」

特別支援教育の免許を取得している教員は、各学級に1～2名程度。その代わり、専門知識をもたない、有給のボランティアティーチャーという補助員がサポートしていた。彼らに特別支援教育のノウハウを簡単に教えられないか。そこで考えたのが、誰でも使える教材づくりだった。1から10までの数字を並べるパズルをはじめ、手先や指先を動かす練習用としてペットボトルの蓋を開け閉める道具など、計20種類を考案した。熱心な指導主任が教育事務所に異動してきたことで、教材の普及も加速。現地語に訳した教材集も作成し、ボランティアティーチャー向けの勉強会も実施した。「子どもたちがニコニコしながら教材で遊んでくれたのは、本当に嬉しかったですよね」と吉岡さんは振り返る。

【地域で育てる種やかな子に いこうが経験のできる場を】

「日本と比べて経済的な貧しさはありますが、地域の人たちは子どもたちのこ



子どもと米研ぎをする吉岡さん。様々な体験と一緒に行うことで、子どもが自信を持って、楽しみながら成長できるような、応援する。

とよく知っており、地域全体で彼らを育てていると感じました」吉岡さんは、スリランカで大きな気づきを得た。現地では、地域内の人々の繋がりが強く、子どもたちはいつも笑顔で、穏やかな子が多いように感じた。一方の日本は、核家族化が進み、ひとりっこの子も多い。「日本では、ちょっとしたことでニコクになったり、癪癪を起したりする子が多い気がします。ゆりの無や人間関係の希薄さが、子どもたちの情緒面に影響を与えているのではないかと思います」帰国後、吉岡さんは放課後等デイサービスの施設に就職。考案した教材を活用するなど、スリランカでの経験を実践し活かし始めたほか、現地の民族衣装サリーの着付け体験や現地語の挨拶講座など、文化紹介も行った。「確実に子どもたちの世界が広がったと思います」地球儀を持って来ては、「先生が行ったほどだったけど」と何度も尋ねる子どもたちがあふらした。

吉岡さんは父親の定年退職を機に、地元の地区になかった障害児通所支援施設を設立しよう一念発起。2021年2月、児童発達支援・放課後等デイサー

ビスを行う「子ども支援クラムボン」を家族とともに開所した。この施設が目指す姿はまさに、スリランカで学んだ「地域で育てる」学習支援だ。型にはまった施設ではなく、子どもたちのコミュニケーションを重視し、様々なプログラムを考えている。編み物も教えたり、近くの畑で農作業をしたり、調理体験をしたりすることも検討している。また、外国人留学生などにも声をかけ、国際理解や国際交流も取り入れて、子どもたちの視野を広げていきたいと考えている。

「支援を必要とする子どもたちは、自信のない子が多いんです。勉強でも運動でも、何か自信を持って、楽しみながら自分らしく過ごせるよう、手伝いができればと思っています」



「子ども支援クラムボン」を開所。子どもたちに寄り添い、彼らが笑顔で安心して過ごせるよう、「地域で育てる」学習支援施設を自館している。

吉岡 詩織さん プロフィール

長崎市出身。大学卒業後、私立高校教員を経て長崎県立鶴南特別支援学校五島分校高等部に勤務。特別支援教育に携わるようになる。2017年の2月2年、青年海外協力隊に参加。スリランカにて障害児・者支援職員として活動。帰国後、障害のある子ども発達支援の支援施設に勤務。2021年2月、家族とともに児童発達支援、放課後等デイサービスを行うクラムボン合同会社を設立し、代表に就任。

ビスを行う「子ども支援クラムボン」を家族とともに開所した。この施設が目指す姿はまさに、スリランカで学んだ「地域で育てる」学習支援だ。型にはまった施設ではなく、子どもたちのコミュニケーションを重視し、様々なプログラムを考えている。編み物も教えたり、近くの畑で農作業をしたり、調理体験をしたりすることも検討している。また、外国人留学生などにも声をかけ、国際理解や国際交流も取り入れて、子どもたちの視野を広げていきたいと考えている。

「支援を必要とする子どもたちは、自信のない子が多いんです。勉強でも運動でも、何か自信を持って、楽しみながら自分らしく過ごせるよう、手伝いができればと思っています」

吉岡さんへのエール!

放課後等デイサービスあひび
管理者
長岡 史高さん



周囲を巻き込み、引っ張ってくれる存在

好奇心旺盛で、何事にも懸けることな(チャレンジ)する人。当施設で働いていた時は、スタッフのけん引役でした。自身が楽しむことを決して忘れず、知らず知らずに周りを巻き込み、温かい雰囲気をつくってくれました。一方で、子どもたちを叱るときも非常に厳しい表情は、とても印象的に忘れられません。同業者として、吉岡さんの更なる活躍を願いつつ、またどこか一緒に仕事ができることを楽しみにしています。

* 発達障害も含めた、特別な支援も必要とする幼児・児童・生徒の自立や社会参加への取り組みを支援・指導すること。

* 障害や発達に特性のある学習困難児が、学校の授業終了後や休日に通い、療育や居場所機能を購入サービスのこと。

日本も元気になるJICA海外協力隊
九州のフロンティア人材

青年海外協力隊

熊本県



地域のための美術館を目指して

宮本 武蔵さん 芦北町立星野富弘美術館 参事(学芸員)
Takekura Miyamoto

日頃は意識しなくても、青年海外協力隊での経験が自分の芯を作っている、と気づく時がある。多くの人のための様々な思いを受け止めつつ、ポジティブな気持ちで何事も建設的に考えること。そんな強みを活かして、地域のための美術館運営に静かな情熱を燃やす。

公務員として 更なる人的成長を目指して

熊本県芦北町では、これまで3名の役職職員が派遣条例^①の適用により青年海外協力隊に参加。帰国後はその経験を活かしながら、町のさまざまな部署で活躍している。

町立星野富弘美術館で学芸員として勤務する宮本武蔵さんもその一人。大学卒業後、イギリスへ留学した宮本さんは、語学力を活かしてさまざまな分野の仕事ができて公務員に魅力を感じ、地元芦北町に就職した。先輩職員が協力隊に参加する姿を見て、自身も開発途上国で人的成長を遂げたいという思いが募り、応募を決意。2009年4月の2年間、アフリカのガーナでプログラムオ

フィサーとして活動した。

芯を持って働くことを学んだ 協力隊時代

ガーナでは、海外の資金援助を受けて活動する現地の地域開発系NGOに配属され、業務改善や事務所管理運営などの指導を任された。

「とにかく忙しいNGOで、スタッフは行き先も告げずに現場へ出ていくため、電話がかかっても何処にいていつ戻るのが、分かりませんでした。そこで、日本では当たり前のことですが、行き先や帰社時間などを共有する仕組みを導入しました」

資金調達の際には、名刺やポスターのほかパンフレットなどの資料を作り、

分散していた事業報告書を一か所にまとめて閲覧できるようにするなど、町民向けにサービスを提供する役場での業務経験が活かされることも多かった。

「資料のリソースセンターを設立することで、開発学を学ぶ大学生が勉強しに来るようになりました。また、海外からの視察団には、きちんとした組織であることをアピールするのにも貢献できたと思います」



町内の小学校では、美術館の教育普及活動として出前講座などを行うなど、協力隊経験も織り交ぜながら、盛んな世界、いの中の暮らしを喜びについて伝えている。

星野富弘さんの描く世界をどうやって来場者へ伝えるか、年5回の展示入れ替えは、学芸員にとって腕の見せ所でもある。

保育園児のためのお絵描き講座、小さいうちから「町の美術館」に愛着を持ってもらうための取り組みの一。

同僚から「組織にとって大切なことを教えてくれる存在」と感謝されていた宮本さん。協力隊活動を通して「何のためにその仕事をするのか」を意識しながら取り組むようになり、帰国後も自分の仕事の意義を考えながら、芯を持って働くことができているという。

展示物を見せるだけでなく、資料の保存管理や資料を使った教育の普及も大切な仕事と考えている。目的・意義を考えながら能動的に仕事を生み出す点は、協力隊時代と変わらない。

「人口1万7千人の小さな町に美術館があることの意義を考え、子どもたちや地域の人々に何を伝えられるか模索しています。地域のためになる美術館でなければいけないし、ただ存在するだけではもったいない。美術館の活用を学校教育に取り入れてもらうなど、地域に役立つメイン事業を考え、実施していきたいと思っています。現場はまだまだ受け身。そこにどうにかして入り込み、地域のリソースを使いながら新しい流れを生み出す働きかけは、協力隊の活動と似ていますね」

小さな町にある 美術館の意義とは

現在勤務する美術館には、星野富弘さんが描く水彩の詩画が展示されている。群馬県出身の星野さんは、身体に障がいがあるながらも、口に筆をくわえて文や絵を描きはじめた詩人・画家だ。ここ芦北町の美術館は、群馬県高崎市にある本館の姉妹館として2006年にオープンした。

「すべてを他人に頼ってしか生きていけない状態の中で、星野さんは自分のことを考え、詩画を描くようになりました。彼が伝える、いの中の暮らしを喜びを感じていただければ嬉しいですね」

出合いは財産、 原動力の源

帰国して10年近く経つと、日常生活の中で協力隊経験を意識することはあまりない。しかし、日頃何事にも柔

宮本 武蔵さん プロフィール

熊本県芦北町出身。別府大学文学部歴史学科を卒業後、イギリスへの語学留学を経て芦北町役場へ入庁。国民健康保険・年金事務を担当。2009年3月から現在までの派遣先を留め活用して青年海外協力隊に専念参加し、プログラムオフィサーとしてガーナで活動。帰国後は町役場に復帰し、国際文化交流担当などを経て現在に至る。

軟に対応し、物事を前向きに、建設的にとらえる気持ちを持っていただけるのは、協力隊経験が自然と自身の中に根付いているからだと宮本さんは語る。

チャレンジしたからこそ出合い、命の尊さや生きる喜びをも教えてくれたガーナの人人や、同じ志を持って海外に飛び立ち、今も連絡を取り合い互いの近況に刺激を受け合う協力隊の仲間たち。

「出合いは財産ですね。仲間アクティブな活動を聞くと、規則的な毎日から一気に引き戻されます。私も常にチャレンジする気持ちを忘れず、地域のための美術館運営にどうすれば新しい風が吹かせられるのか、常に考えていきたいです」

宮本さんへの エール!

町立星野富弘美術館
館長
下田 研さん



彼ならではの世界観を創り出して欲しい

宮本さんは、学芸員としての専門は史学ですが美術もかなり勉強しているの、専門的なことは一任しています。星野さんの詩画の世界に深く入り込まずにはならない難しい作業の際にも、季節に合った詩画を選び、企画内容とマッチする詩画をどう並べかなど、彼の感性に頼ることは大いだと思います。来年は開館15周年。彼が語る、協力隊で培われた「地域のリソースを使いながら新しい流れを生み出す視点」での展開に、大いに期待しています。

① 国家公務員や地方公務員が休職してJICA海外協力隊に参加することを認める条例

日本も元気になるJICA海外協力隊
九州のフロンティア人材

青年海外協力隊

大分県



2つの協力隊経験を活かし、ひとりぼっちをつくらない社会をつくる

奥 結香さん NPO法人Teto Company 理事長
Yuika Oku

マレーシアで学んだのは、地域と繋がることで、自分の想いを実現できるということ。今は日本で、地域と人を繋ぎながら、誰もが集える居場所づくりに取り組んでいる。彼女が目指すのは、障害や年齢などにかかわらず、誰もがひとりぼっちにならない社会だ。

福祉に抱いた違和感 答えを求め、協力隊へ

大分県竹田市の城下町にある築100年の古民家。ここに地域の交流スペース『みんなのいえカラフル』がある。学校や職場とは違う、誰にでも開放された居場所、ふらっと立ち寄りご飯を食べる場所、発達に課題のある子ども



の遊びや学びの場所。「ここに来たら一人じゃない、そう思えるような居場所を目指しています。お腹の中にいる子どもから100歳を超えるお年寄りまで、誰もが利用していただけますよ。そう気軽に話すのが、開所者の奥さんだ。

20歳のときに介護福祉士となり、発達医療センターなどで働ながらも福祉への違和感を抱いた。「障害の有無にかかわらず、誰もが集える居場所をつくれないうらなうか」そう考えた奥さんは、次いで特別支援学校の教員となったものの、教育現場でも自身の思いを実現させることはできなかった。そんなとき、発達障害の一つである自閉症の症状が「海外で言葉も分かんぬま、一人取り残されているようなもの」と聞かされる。

自身を同じような状況に置けば、自閉症がどういふものか、その苦しみも少しで分かるのではないかと。そんな思いから選んだのが、青年海外協力隊だった。

強い想いで地域を動かす 600人集客のフォーラムを主催

奥さんは、障害児・者支援隊員としてマレーシアに派遣され、教材づくりや各地の特別支援クラスの巡回、教員へのアドバイスなどを任せられた。巡回先の学校は、特別支援教育を発展させたいという気持ちはあるものの、それを具体化させる答えは持ち合わせていなかった。そこで奥さんは、作業療法士や保護者、教員たちが子どもたちの情報を共有するこ



「みんなのいえカラフル」には、子どもから高齢者まで多くの人が訪れる。利用者の年齢層が100歳を超えることもあるという。



障害の有無や世代に関係なく食卓を囲み、一緒にご飯を食べる「ごはんふるじくじく」。気軽に交流ができる場をつくっている。



奥さんの目指した「ひとりぼっちをつくらない」居場所。地域課題の解決に向けたモデル事業として、期待が高まっている。

多世代が支えあう場所をつくる 地域のモデル事業を目指して

とができるように、彼らの生育をまとめたサポートブックを作成。また、教員向けにFacebookグループをつくり、子どもたちの関わり方や特別支援教育に関する教材の紹介を動画で渡し、情報を届ける工夫も行った。

そんな奥さん「特に力を入れたのは、協力隊の仲間と共に開かれた特別支援教育のフォーラムだった。『特別支援クラスの子どもたちは、卒業後も自立できる道が少ない。この問題を、地域の人たちと考えたいと思ったんです』好事例紹介の準備に応用行動分析学の専門家の招へいも決まった。しかし、いよいよというときに持ち上がったのが、「人が集まる催事には食事を出す」というマレーシアの慣習。食事などは集客に期待できないと忠告を受けた。そこで奥さんは、慣れないマレー語を駆使し、あらゆる関係先に食事の支援協力を要請。ついに、後輩隊員の配属先から予算を捻出してもらうことに成功し、3日間の開催で延べ600人が集まる大盛會となった。「大切だと思うことに全力を注ぎ、思いをぶつければ、地域を動かす実感を得られたことが収穫でした」

帰国後に奥さんが選んだのは、竹田市での地域おこし協力隊だった。「障害者や高齢者など誰でも集えるデイスパース」以前からこのアイデアを持っているとき、地域おこし協力隊でまたま出会った古民家のオーナーと意気投合。建物を無償で貸してもらえることになり、2018年に『みんなのいえカラフル』をオープンさせた。若い人も若さも、障害者も健常者も、利用者は話をしたり遊んだり、みんな好き勝手に過ごしている。こうして生まれた「ひとりぼっちをつくらない」居場所は、助成金や一般寄付、地域の人たちの手伝いで運営され、1年間の利用者は4,500人にまで達した。

また、奥さんはNPO法人Teto Companyを起業し、『みんなのいえカラフル』を運営。地域おこし協力隊任期終了後の2020年には、放課後等デイサービス「アソビバTeto」も始めた。「介護が必要になっても、その人がこれまで大切にしていた“くらし”を楽しめる、そんな居

奥 結香さん プロフィール

大分県出身。介護士や特別支援学校の教員を経て、青年海外協力隊に参加、マレーシアに派遣され、障害児・者支援隊員として活動。帰国後、大分県竹田市の地域おこし協力隊として、子どもからお年寄りまでが集まる交流スペース『みんなのいえカラフル』を開所。現在はNPO法人Teto Company理事長として、ひとりぼっちをつくらない社会づくりに目指し、発達発達支援・放課後等デイサービスなどを運営。

所づくりを広げたいですね」事業の拡大に伴い、別の古民家も購入。作業療法士や看護師の雇用も検討中。こうした地域の居場所づくりは、引きこもりの防止や犯罪の抑止、介護問題の解消など、地域の課題解決と活性化、そして経済効果にも繋がっている。一方で、活動を広げようにも、行政の法整備などの制度が追いついていない現実にも直面している。「モデル事業となって既存の制度を変えられるよう、私たちの活動を広く発信していきたいです」

たとえ壁にぶつかったとしても、マレーシアで鍛えられたその粘り強さと情熱は、奥さんは挑戦を続けていくことだろう。

奥さんへの エール!

竹田市商工観光課副課長 後藤 雅人さん



地域と人を繋いでくれる存在

地域おこし協力隊に応募された時から、目的が明確な方でしたね。コミュニティに入るまで、自分の考えを押し付けるを周りはアレレギを起こしますが、奥さんはどんなファンをつくり、支援者を増やして来られた。出会いを大切に、感謝を忘れないう人だからこそ成せる業です。地域の声を行政に上つたれる、ハブ的な存在でもあります。奥さんの挑戦を、これからは一市民として応援していきたいと思ます。

日本も元気になるJICA海外協力隊
九州のフロンティア人材

青年海外協力隊

宮崎県



故郷で続ける「飽くなき挑戦」、世界と繋がる「教育」と「ビジネス」を創る

田阪 真之介さん 宮崎大学 特別教授/株式会社グローバルプロジェクト 代表取締役
Shinnosuke Tasaka

一見、無謀とも思えるような数々の挑戦には、確固たる裏付けがあった。それは、青年海外協力隊で磨かれた「分析→企画」「設計→実行」というスキル。いつしかその力は様々な立場の人を結び付け、故郷と世界を繋いでいく。

苦手な英語にあえて挑む 新卒参加で味わった実力不足

田阪さんは大学卒業後の進路を考えた際、「広い世界を見てみたい」と思った。そんな時、電車の中吊り広告で「青年海外協力隊」の文字が飛び込んできた。「英語は苦手でしたが、海外で仕事をしてみたくて、社会人経験者の多い協



力隊に新卒での参加を決めました」派遣されたのは、東カリブ海に浮かぶ島国セントルシア。小学校教諭の隊員として勇んで行ったが、教員経験もない自身の力不足を痛感させられた。その中で、「今の自分の力でできることは何か」を考えて取り組んだのが、セントルシア全土での模擬試験の実施だった。試験を通じて生徒の弱みや強みを分析し、授業にフィードバックさせるというのだ。教育経験が豊富な仲間の隊員を中心に据え、自身は現地カウンセラーたちに協力を仰ぐなどの裏方に専念し、実施にごぎつた。

がむしやりに走り抜けた2年間だったが、帰国後に気づいたことがある。それは「現状を分析して企画を立て、そ

れを基に設計して実行に移す」という行動を、常に繰り返していたことだった。

ビジネスでスキルアップを 数字で評価される世界に

帰国後、ビジネスの世界で成長してみたいの思いから、大手の教育関連企業に就職した。海外経験のタフさを買われ、任されたのはコンサルティング営業。「お客さんに喜んでもらうつつ、しっかり結果を出す。数字で評価されることは、協力量隊では学べなかったこと。ビジネスの醍醐味を味わうことができました」そんな時、バングラデシュの経済学者ムハマド・ユヌス氏がソーシャル・ビジネスを受賞。彼の「ソーシャル・ビジネス」



トビタテ留学JAPANで留学した大学生と田阪さんらと撮影した写真。海外留学で学んだ学生の青春を押し繋いでいる。

という言葉と出会い、協力量隊とビジネスを掛け合わせることができると考えた。バングラデシュとインドネシアに飛んでフィールド調査を実施。社内の新規事業コンペティションにて「模擬試験を遠く国でも販売する」と企画・提案したところ、最優秀賞を受賞した。

その後、田阪さんは35歳で退職し、故郷の宮崎県でNPO法人グローバルカデミーを起業。テーマは「宮崎と世界を繋ぐ教育とビジネスを創る」。地方で、自分一人の力でブレイクスルーを起こしてみたいと思ったんです」

宮崎と海外を繋ぎ地方創生 教育で起こす地方の好事例

故郷を舞台にした新たな挑戦。ここで活かされたのは、「分析→企画/設計→実行」というスキルだった。県内高校生・大学生の海外留学生数を増やそうと、地元企業でのインターンシップも兼ね備えた県独自の留学制度「トビタテ」留学JAPAN(日本代表プログラム『地域・人材コース(宮崎創設)』を、産学官連携で2016年に創設。2019年ま



B-JET生と日本の小学生をオンラインで繋ぎ国際交流会を開催。お互いの文化を学び合う、貴重な機会となっている。

でに30人を、15ヶ国へ送り出すまでに成長させた。

また、株式会社グローバルプロジェクトを起業。地方の高校生が、学んだ英語を使ってコミュニケーションをする機会を少しでもという課題に対し、英文添削を通して海外と繋がり、外国人の友だちと文通する感覚で英語力を高めるICT教材「スマートブックチャコレクション」を企画・設計した。国際交流にも繋がることが評判となり、リリースから3年で全国約200校、8万人が使うサービスまで成長している。

その後、JICAの専門家として事業総括を担ったのが、日本のIT人材不足とバングラデシュの雇用問題を同時に解消する「日本市場をターゲットとしたICT人材育成プロジェクト」(略称B-JET)だ。バングラデシュのIT関連学部卒業生を対象に、現地で3ヶ月間の日本語教育とIT技術研修を行い、更に宮崎大学での日本語教育と地域企業でのインターンシップを経て、高度なICT技術を有する外国人材の日本での円滑な就業を支える人材の育成。県内では、宮崎大学と行政、そして地元IT企業が「宮



日本政府からも期待を寄せられるB-JET生たち。当時の経済再生担当大臣がバングラデシュを視察した際に面会し、激励を受けた様子。

田阪 真之介さん プロフィール

宮崎県出身。大学卒業後、新卒で青年海外協力隊に参加。セントルシアにて小学校教諭隊員として活動。帰国後は、教育関連企業などを経て、地元の宮崎県にNPO法人やベンチャー企業を設立。産学官の連携事業を展開し、宮崎県バングラデシュを結ぶ「日本市場をターゲットとしたICT人材育成プロジェクト(B-JET)」を総括担当。同事業が宮崎大学に引き継がれることから、2021年4月より同大学特別教授に就任。

崎→バングラデシュ・モデル」と呼ばれるシステムを構築。宮崎市では、バングラデシュ人材を採用した企業には補助金を支給する制度も設立された。「草の根の活動から行政の制度にまでしてもらえたことは、嬉しかったです」

協力量隊で磨かれた「分析→企画/設計→実行」のスキルを使い、挑戦を続ける田阪さん。「立場や考えも異なる人たちとの連携や支えがあって今があるんです。そう思えるのも、協力量隊の経験があったからこそ。多少なりとも、故郷や地元にも貢献できていますからね」

田阪さんの、世界と繋がる「教育」と「ビジネス」を創る、という飽くなき挑戦は、これからも続いていく。

田阪さんへの エール!

宮崎大学
副学長(国際連携担当)
村上 啓介さん



日本全体のメリットになるシステムを作ってくれました

常にアクティブで前向き、調整能力が長けています。思慮深く、かつリーダー性行動力は、協力量隊経験の賜物です。地方の労働人口には減り、人材確保が課題です。IT人材は、建設業やICTなど幅広い分野での活躍が期待されています。彼の作り上げた「B-JET」は、宮崎だけでなく日本全体のメリットになるでしょう。彼は我が大学の「宝物」。これからも、大学と外の世界との「繋ぎ役」として活躍を期待したいですね。

日本も元気になるJICA海外協力隊
九州のフロンティア人材

青年海外協力隊

鹿児島県



フィリピンで従事した観光地のサポート 故郷を見直すきっかけに

後藤 まどかさん 一般社団法人南さつま市観光協会 スタッフ
Madoka Ooto

旅行会社でキャリアを積み重ねながらも、故郷には「何もない」と思っていた。しかし、フィリピンで人と地域の繋がりを知り、今までにない視点が発芽えた。2年後、故郷に戻った彼女の目に見えたのは、輝かしい地元の“宝物”だった。

28歳で初めて知った協力隊 試したかった自分の力

「魅力あふれる南さつまの観光を楽しみながら一緒に盛り上げてくれる、豪腕ピッチャーのような選手にぜひ来ていただきたいです！」

移住者を募集する地域を“球団”、移住希望者を“選手”と見立て、プロ野



球のドラフト会議のように地方移住を促進するイベント「九州移住ドラフト会議2021」。ひときわまるい声で地元をアピールするのは、鹿児島県南さつま市の“球団”『すなまちキンカンズ』代表の後藤さんだ。今では観光協会のスタッフを務めるが、「地元が観光地だなんて、昔は思ってもいませんでした」と笑う。そんな彼女の視点を変えたのが、青年海外協力隊での経験だった。人に喜んでもらえる仕事がかしたいと、最初に選んだ福岡県の旅行会社では9年間働いた。28歳の時、友人から協力隊について教えられ、“観光”という職種があることを知った。「自分の力を試してみたいと思いました」チャレンジ精神に火が付き、参加を決意。フィリピンで

も多数の観光地、ポホール島の州政府観光センターで活動することになった。

気づかされた大事なこと 人と人が支え合う関係

現地での活動は、エコツーリズム推進のサポートだった。現地スタッフとともに、自然が輝く写真映えスポットを探したり、時にはジャングルをかき分けて滝を探しに行くこともあった。そんな中、地元大学のインターンとして観光センターで働く学生たちの中に、島から外に出たことがなく、旅行経験もない人がいることを知った。「ポホール観光の“おもてなし”を担っていく彼らに、旅行の楽しさを経験させてあげたかったんで



地元高校生が企画・運営に携った「吹上浜砂の祭典」。参加者が能動的に取り組めるような仕組み作り、人気を博すイベントとなった。

す」思いついたのは「異文化交流フェスティバル」、日本への“疑似旅行”だった。協力隊の仲間をはじめ、職場や現地JICA事務所にも協力を呼びかけ、大学の体育館に書道や藍染めなどの日本文化体験コーナーを設け、日本の『一村一品』に倣って紹介するパネル展示なども行い、約700人を集客した。「一人の力ではできなかったですね。多くの人に支えられていることを知る、貴重な経験でした」

また、自然災害に対する観光事業者の意識改革も行った。観光客を受け入れる島だからこそ、災害に強い観光地ではなくてはいけないと考えたからだ。防災分野の仲間の力も借り、ホテルなどの災害対策の実態調査を行ったほか、現地防災局と観光センターとの合同で、事業者向けの防災セミナーを実施。年齢や立場を超えて、多くの人と協力し合いながら防災や減災の意識を高め、考えを浸透させていった。

「フィリピンでは、日本で働いているときは見落としていた、人と人が支え合う関係のありがたさに気づかされました」

後藤さんへの エール！

一般社団法人
南さつま市観光協会
事務局長
園田 親久さん



地元に着け込みながら、観光を盛り上げてくれています

ふらっと協会に遊びに来た時、たまにスタッフを募集していた縁で働いてもらっています。積極的な仕事をし、水を得た魚のように生き生きとしていますね。明るくて元気よく、行動力もあります。観光の企画では、あちこち回って地元に着け込みながら考えてもらっています。高校生たちとも話が弾むので、良い先生役でもありませぬ。これからは地域に密着しながら、頑張ってもらいたいと思っています。

未来クルーズ！〈第4回〉



人生の先輩との交流を通じて、高校生が未来を疑似体験するイベント「未来クルーズ」。後藤さんは、多様性を知る「きっかけづくり」にも積極的だ。

再認識した故郷の“宝物” 協力隊経験を活かして磨いていく

帰国後、故郷に戻ると、以前とは異なる風景が見えた。日本三大砂丘「吹上浜」やマリンスポーツ、海や山の幸、そしてそれを支える真心溢れる人たち。外の世界を知ることで、南さつま市の宝物を再認識した後藤さんは、地元の南さつま市観光協会が働き始めた。

現在の仕事でも、高校生などの若者がイベントに参加しやすい環境づくりに取り組んでいる。例えば、南さつま市で開催する日本最大級の砂のイベント「吹上浜砂の祭典」では、地元高校生に主体的に企画・運営に携わってもらうプロジェクトを実施。地元の食材で彩られたホットドッグや砂を活かした体験メニューなどを実現させ、彼らに達成感と自己成長を感じてもらえるよう工夫した。「家族など来場者も増え、何より嬉しいのは、彼らの自信に繋がること。みなさんにとってWin-Winの企画になりました」2020年は、新型コロナウイルス感染症の拡大でイベントが中止になったものの、「吹上浜砂の祭典の思い出」『こ



女性消防団の一員として、被災地復興支援上乗会の企画に携わった後藤さん。防災活動にも加わり活動の幅を広げている。

後藤 まどかさん プロフィール

鹿児島県出身。福岡県の旅行会社に9年間勤務した後、青年海外協力隊に参加。フィリピン中部のポホール島に観光隊員として派遣され、エコツーリズムのPRや観光客の防災などに携わる。帰国後、一般社団法人南さつま市観光協会のスタッフとして勤務。地元各所でイベントをはじめ、季節ごとの旬の産品を詰め合わせた「エールギフト」の企画・販売などに担当。

んな映像を見たい！」といったメッセージを募集し、地元を盛り上げている。また、南さつま市の季節ごとの特産品を発送する「エールギフト」の商品開発も担当する。旬の有機野菜や焼酎、金柑ジャムなど、めばいし商品を見つけては、生産者に協力をお願いに行く。フィリピンで取り組んできた地域産品の掘り起こし経験が、ここでも活かされているのだ。「エールギフト」は、コロナ禍で販売機会を失った卸業者や業者でできない地元出身者にも好評で、人気商品になりつつある。

「フィリピンでは、仕事でもプライベートでも、地域と人との繋がりを強く感じました。協力隊で学んだことを、これから故郷に還元していきたいですね」

JICA海外協力隊に興味のある方、帰国隊員の方、ご家族や自治体・団体・企業などの皆さまへ、九州を拠点としたJICA国内窓口のご案内です。

「JICA九州」

九州センター(JICA九州)は、九州と開発途上国との国際協力の結節点として、1989年3月に北九州市に開所されました。スタッフ全員がこれからも、九州各県の皆さまと共に世界の課題、九州の優位性や課題を共有し、それぞれの課題解決のために国境を越えて連帯、協働するための結節点でありたいと思っています。

JICA九州

独立行政法人国際協力機構 九州センター
〒805-8505 福岡県北九州市八幡東区平野2-2-1
TEL:093(67)16311 FAX:093(67)10979
E-mail: jicakic@jica.go.jp

JICA九州ホームページ

<https://www.jica.go.jp/kyushu/index.html>



JICA九州 Facebook

<https://m.facebook.com/login.php?next=https://www.facebook.com/jicakyushu/>
jicakyushu?&rfsrc=deprecated_rdr



全国のお問合せ先一覧

(青年海外協力隊事務局連絡先など全般)
<https://www.jica.go.jp/volunteer/oomat.html#link02>



国際協力推進員 (JICAテスク) 「地域の JICA 窓口」

JICA国際協力推進員は、各県の身近な「地域のJICA窓口」として、地方自治体の国際交流機関を拠点に活動しています。国際協力や異文化理解教育、多文化共生事業に関する活動やイベント等のさまざまな取り組みを行っていますので、どうぞお気軽にご連絡ください。

九州各県の JICA テスク (国際協力推進員配置先はこちら)

福岡県 (公財)福岡よかトピア国際交流財団

〒812-0025 福岡市博多区東区町4-1 国際市国際会館1F
TEL:090-7167-4219
E-mail: jicadod-desk-fukuokaesh@jica.go.jp
URL: <https://www.jica.go.jp/kyushu/prf/fukuokaesh.html>



佐賀県 (公財)佐賀県国際交流協会

〒840-0820 佐賀市出島2-1-12 佐賀県立ビル1階
TEL:090-7167-4223
E-mail: jicadod-desk-sagaken@jica.go.jp
URL: <https://www.jica.go.jp/kyushu/prf/sagaken.html>



長崎県 (公財)長崎県国際交流協会

〒850-0862 長崎市出島町2-11 出島交流センター1階
TEL:090-7167-4232
E-mail: jicadod-desk-nagasaki@jica.go.jp
URL: <https://www.jica.go.jp/kyushu/prf/nagasaki.html>



熊本県 (財)熊本市国際交流振興事業団

〒960-0830 熊本県東区花畑町4-18 熊本市国際交流会館内
TEL:090-7167-4233
E-mail: jicadod-desk-kumamotoshi@jica.go.jp
URL: <https://www.jica.go.jp/kyushu/prf/kumamoto.html>



大分県 (公財)大分県芸術文化スポーツ振興財団

〒870-0029 大分市若柳町2-33 lichiko総合文化センター
TEL:090-7167-4235
E-mail: jicadod-desk-otakaken@jica.go.jp
URL: <https://www.jica.go.jp/kyushu/prf/otakaken.html>



宮崎県 (公財)宮崎県国際交流協会

〒892-0816 宮崎市山下町14-50 こまき県民交流センター1F
TEL:090-7167-4238
E-mail: jicadod-desk-miyazaki@jica.go.jp
URL: <https://www.jica.go.jp/kyushu/prf/miyazaki.html>



鹿児島県 (公財)鹿児島県国際交流協会

〒892-0816 鹿児島市山下町14-50 こまき県民交流センター1F
TEL:090-7167-4238
E-mail: jicadod-desk-kagoshimaken@jica.go.jp
URL: <https://www.jica.go.jp/kyushu/prf/kagoshima.html>



青年海外協力隊相談役

JICAは、全国の国内拠点に青年海外協力隊相談役を配置しており、九州には、3名の青年海外協力隊相談役がいます。帰国隊員の進路相談や、履歴書・職務経歴書の添削、就職・進学に関する各種情報提供を行い、進路決定をサポートしていますので、お気軽にご連絡ください。また、海外協力隊経験者の採用をご検討の企業・団体の方のご相談もお受けしています。

【九州の青年海外協力隊相談役の連絡先(担当)】

福岡・佐賀・長崎県 jicakicp-cs1@jica.go.jp TEL:090-3190-7198
大分・宮崎・鹿児島県 jicakicp-cs2@jica.go.jp TEL:0985-31-7019
熊本県 jicakicp-cs3@jica.go.jp TEL:096-359-2130

帰国隊員の進路開拓についての相談受付

https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/counselor/index.html



お役立ち WEB サイト & 「こんな時は、ここに相談」

全体概要はこちら (JICA 海外協力隊トップページ)

<https://www.jica.go.jp/volunteer/index.html>



JICA九州HP JICA海外協力隊

<https://www.jica.go.jp/kyushu/enterprise/volunteer/index.html>



企業、自治体、学校関係者の方へ

<https://www.jica.go.jp/volunteer/relevant/index.html>



地元での就職に興味のある
隊員がいないかな?
▶ 該当県の青年海外協力隊相談役

社員や職員を協力隊員として派遣してみたい。

▶ JICA九州 青年海外協力隊事務局 参加促進課

※在職したまま、JICA海外協力隊として活動し、その経験を企業や地域、学校現場で還元する現職参加制度、現職教員特別参加制度の詳細は、Bページへ。



児童生徒や社員に協力隊の体験談を話してほしい。
▶ 該当県の JICA テスク



JICA 海外協力隊に興味がある方へ

<https://www.jica.go.jp/volunteer/seminar/index.html>



OVの人から直接、
ざっばらんに話を聞いてみたい!

▶ 該当県JICAテスクまたは、各県OV会(協力隊ナビ等)



個別に相談したい。
▶ 該当県のJICAテスクまたは、JICA九州



帰国隊員の方へ(その他、進路開拓支援のご案内)

https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/index.html



隊員経験を生かせる場がほしい!
▶ 該当県の JICA テスク



九州でどんな国際交流イベントがあるのを知りたい。
▶ JICA ホームページ、Facebook

隊員のご家族の方へ

隊員の支援制度やご家族の現地視察ののご案内

<https://www.jica.go.jp/volunteer/family/index.html>



その他

よくある質問まとめ

<https://www.jica.go.jp/volunteer/faq/index.html#seinen>



◀ 帰国後もつながる JICA 海外協力隊経験者（※OV会） ▶

JICA海外協力隊経験者たちは、帰国後も、
職種や派遣国、出身県などの共通項でつながり、さまざまな活動を行っています。

※OVとは、Old Volunteerの略であり、JICA海外協力隊経験者を意味します。

都道府県別

同じ都道府県、市の
在住者や出身者など

派遣国別

派遣国と同じ
JICA海外協力隊経験者など

職種別

派遣中・帰国後の
職種・活動領域などが同じ
JICA海外協力隊経験者など

派遣国別・分野別OV会や
九州以外の各県OV会について
の問い合わせ等ははこちら

青年海外協力協会 (JOCA)

[https://www.joca.or.jp/activities/
network/](https://www.joca.or.jp/activities/network/)



帰国後も、OVが集まってさまざまな活動を行っています。

各県OV会では、各々が国内外で社会生活を送りながら、
OVのつながりを大切にさまざまな活動に関わっています。
興味・関心をお持ちの方は、ぜひ各OV会へご連絡ください！

九州の主なOV会活動

- ・国際協力・多文化共生理解促進イベントの開催
- ・JICA海外協力隊説明会サポート
- ・地方自治体などが実施するフェスティバル等への参加
- ・出発・帰国隊員の自治体表彰同行
- ・災害被災地の復旧・復興支援活動
- ・隊員同士の懇談会 など

JICA九州ホームページで、
九州7県のOV会について
ご案内しています。

九州7県のOV会

[https://www.jica.go.jp/kyushu/
enterprise/volunteer/kikoku.html](https://www.jica.go.jp/kyushu/enterprise/volunteer/kikoku.html)



協力隊を育てる会・支援する会

地域から世界にネットワーク作り

民間の立場で広く国民にJICA海外協力隊事業への理解を求め、協力隊事業に対する民間の支援の輪を広げていくことを目的とした、地域の協力隊支援者で成り立つ全国の育てる会組織です。九州各県でも、派遣隊員の社行会や帰国隊員の報告会、国際理解の集いなどを、地元企業や大学などの教育機関、自治体、協力隊OV会、JICA国内機関と連携しながら、地域性を活かした独自の活動を展開しています。

一般社団法人 協力隊を育てる会（支援する会）

<https://www.sojocv.or.jp/index.html>



FUKUOKA

福岡県青年海外協力協会

水害に遭った東峰村の方々に元気になっていただけるよう、「東峰村夏祭りワールドグルメ支援2018」を実施。協力隊OVが途上国で元氣をもらった料理を販売して、売上金を寄付し、「東峰村夏祭り」の最後を彩る花火の打ち上げに協力しました。
また、隔月毎に協力隊ナビを開催し、協力隊に興味・関心がある方々を招き、ざくざくらんに質問や相談ができる機会を提供。OVが集う機会もなっています。



OITA

大分県青年海外協力協会

大分県青年海外協力協会では、10月の「おおい国際協力啓発月間」に大分市で開催されている「おおいワールドフェスタ」に毎年参加し、出店しています。
2021年にはアンザックビスケットとチェンマイコーヒーの販売を行いました。販売を通して、協力隊や外国のことに関心を持った人たちの交流を楽しむことができました。



KUMAMOTO

熊本県青年海外協力協会

熊本県立大学と協働で、2020年7月の豪雨災害復興支援活動を実施。ともに土砂や瓦礫の除去、高圧洗浄や浸水家具の運び出しなどの活動を行う中で、連帯感が生まれただけでなく、OVのさまざまな進路から国際協力で興味を招く学生もいました。
また、県内地域ごとに協力隊との交流会イベントなども開催し、地域活動を主軸に活動しています。



SAGA

佐賀県青年海外協力協会

毎月1回、JICAデスク佐賀・佐賀県国際交流協会と一緒に、えびすFMにてJICA広報番組「Jump to the World!」を放送中！
協力隊ナビでは、活動報告会や映画上映、焼き物の里らしく陶芸館員による「陶芸さす」等、月替わりで異文化理解の場を提供しています。内容によっては、ハイブリッドでの参加も可能です。



NAGASAKI

長崎県青年海外協力協会

JICA福岡デスクと共催してのオンライン帰国報告会や、県民の皆様が異文化体験をすることのできる場の提供を行っています。
昨年、長崎西洋館にてイベントを実施しました。写真パネルの展示、OVが持ち帰った産物の販売、多言語での説明がけを行いました。



MIZUAKI

宮崎県青年海外協力協会

これからJICA海外協力隊へ応募する方、検討している方の相談に応じたり、派遣隊員・帰国隊員の県知事や市町村長の表敬訪問に同行し、派遣隊員の激励とともに、赴任にあたってのアフバイス等を行っています。
また、活動中から報告のあった任地の生活や活動状況を掲載した機関紙を発行し、留守家族・県内OV等へ配布しています。



KAGOSHIMA

青年海外協力隊鹿児島OB会

「鹿児島から若い力を世界のために」をテーマに毎年、「国際協力講演会&海外協力隊員帰国報告会」を開催。国際理解や国際協力活動への貢献を期して、中高生や地域住民へ、さまざまなフィールドで活躍する講師や協力隊OVの講話を聴く機会を提供しています。
また、各支部に支部長を配置し、出発前から帰国後まで隊員のサポートを行い、隊員同士の絆を深めています。



九州各県OV会の 具体的活動一例

